



Title	『人文科学論集』の終刊にあたって
Author(s)	岩本, 隆茂; 羽田野, 正隆
Citation	北海道大学人文科学論集, 24, 101-102
Issue Date	1986-03-17
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34387
Type	bulletin (other)
File Information	24_PL101-102.pdf



[Instructions for use](#)

『人文科学論集』の終刊にあたって

北海道大学に法文学部が設立されたのは昭和22年4月であったが、昭和25年に分離、独立して文学部となり、昭和27年には『文学部紀要』が創刊された。当時の文学部の構成教官は、講座に所属する専門教育担当教官と学科目に所属する一般教育等担当教官からなっており、教授会も専門教育のための教授会と一般教育のための教授会は分離して開催されていた。しかし、このときの「北海道大学『文学部紀要』内規」、「同施行細則」やその後の改正（昭和42年）された現行の関係規則などを点検するかぎり、『文学部紀要』において「執筆できる者」は「本学部教官」とのみ記されている。

しかるに昭和28年7月に『外国語・外国文学研究』が、文学部一般教育等教官のうちの外国語教育担当教官を主たる執筆者として、「一般教養部」（当時）から発刊されるに至った。この事実は、一般教育等担当教官の研究条件についてはその所属部局が責任をもつといういわゆる「北大方式」が、文学部では貫徹し得ない事情があったことを示したといえよう。

このような動きは、やがて文学部における残りの人文・社会科学分野の一般教育担当教官の論文発表にも波及し、昭和38年3月には「北海道大学教養部人文科学論集編集委員会」の名称のもとに、「北海道大学」より『人文科学論集』がこれらの教官を主たる執筆者として創刊されることになった。

一方、文学部は、昭和39年の「ユーラシア文化研究室」の発足にともない、『ユーラシア文化研究』をその翌年に発行した。しかし、この「ユーラシア研究室」が北海道大学本部直属の「北方文化研究室」（昭和12年に開設）と合併され、文学部附属の「北方文化研究施設」が昭和41年に開設されるとともに、『北方文化研究』が昭和41年より文学部から刊行されはじめた。

しかし、一般教育等担当教官の研究条件がやや改善され始めるにともない、『人文科学論集』は昭和37年12月から、『外国語・外国文学研究』は昭和50年3月から、それぞれの関係教官の所属する文学部から発行されるようになり、この時点で教官の所属部局とその紀要発行部局の不一致がようやくにして解消された。文学部は一時『文学部紀要』、『北方文化研究』と併せて4種の紀要類を発行する時代が続いたが、『外国語・外国文学研究』は、言語文化部が昭和56年度に創設されるにともない、発行部局が言語文化部に変更となった。（なお、同誌はその年度で終刊となり、翌昭和57年に『言語文化部紀要』があらたに刊行された。）

文学部は昭和60年度より前述の両教授会の一本化をおこない、これに関連する多くの規則の見直しをおこなったが、それにともない『人文科学論集』と『文学部紀要』についても一本化案が諮られた。昭和62年2月20日の教授会において、「北海道大学『文学部紀要』に関する内規」、「同施行細則」の改訂と「北海道大学文学部『人文科学論集』に関する内規」、「同施行細

則」の廃止とが認められ、昭和62年度からは『人文科学論集』と『文学部紀要』の両刊行物を一本化し、『文学部紀要』の名称のもとで刊行が続けられることとなった。

『人文科学論集』は本号をもって24号を数え、昭和37年度から昭和61年度にいたる25年間の歴史を作ってきたが、このような経緯により本号が最終号となる。このため、本号の巻末にこれまで本誌に発表された論文の総目録を掲載し、その歴史の概要を記録するとともに、今後の利用者のための便宜を計ることとした。この総目録からもおわかりのように、これまでの『人文科学論集』のご執筆には、文学部における人文・社会科学関係の一般教育担当教官のみならず、専門教育の教官や、文学部とご関係のあった方々などからも多大のご協力をいただいていた。厚く御礼申し上げます。また、併せて、『人文科学論集』創刊以来今日の終刊にいたるまでさまざまなかたちでご尽力を頂いた、本部、教養部、文学部などの関係者の皆様方にも、末筆ながら厚く御礼申し上げます次第である。

昭和62年2月

北海道大学文学部紀要委員（一般教育） 岩本隆茂
羽田野正隆

付記 この文章における事実関係の多くは、「北大百年史(部局史)』（北海道大学、昭和55年、ぎょうせい）と、『北海道大学教養部三十年史』（北海道大学教養部三十年史編集出版委員会、昭和54年、北海道大学教養部）における記述を参考として書かれているが、文責はもとより岩本と羽田野にある。